

曲り角

昭和43年10月 第3号

巻 頭

食・兵・信

いつか、どこかで次のような話を耳にしたことを記憶している。それは、論語にある、孔子の一弟子が、孔子に政治の要諦について質問したときの師弟の対話である。

孔子は、政治の要に関する弟子の質問に対し「食を足らしめ、兵を足らしめ、民をして

信あらしめよ」と答えた。弟子は、つづいて「やむを得ず三つのうちどれかを捨て去らなければならないとしたら、何を先にすべきか」と質問した。孔子曰く「兵をのぞけ」と。弟子は、「残つた二つのうち、やむを得ず捨て去らなければならないとしたら、何れを先にすべきか」と重ねて尋ねた。これに対する孔子の答は「食をのぞけ、昔から人は皆死ぬものときまつている、しかし信がなければ国は立たない」というのである。

現在わが国の体育は体力一点張りの観を呈している。体力を如何に解釈するかについては諸論があるが、いまとりあげられている体力は、主として肉体的力、あるいは生物学的運動能力の段階のものようである。これは孔子のいう食と兵に相当するものである。兵は肉体力に通ずるものと理解されるからである。

孔子の言葉は、二千五百年も前の政治思想

日本大学 松井三雄

の表現であるにはちがいないが、このなかには、今からみても生きている一脈の真理がふくまれていると思う。

信が地を払っているのがわが国の現状であり、政治・経済の場においても、また教育の場においても、そこに端を発して幾多の問題が生じている。この現状を打解するには教育の力にまつよりほかには方法はない。特に体育活動は、信義の急を培ううえに最適の機会を豊富に蔵している。もちろん肉体力・運動能力も完全な人間には欠くことのできない一要素である。しかし体育がそれだけに終止すると、人間教育を疎外した調教に墮してしまう危険性がある。

この際、体育心理学に志をもつものは、先賢の言をかみしめ、全く教育の立場から、正しい体育を育てあげ、将来に悔を残さないよう努力すべきではなかるうか。

山登りの心理

目的

その生涯を山にかけている登山家たちは、何故山に登るかと人によく問われる。それに対して、山がそこにあるからなどは有名な答であるが、とにかく彼等は、人にそのように問われるだけの何かを持っている。そこで、このように問われる何かとはどんなものか、またそのように問われながらもなお山登りを続けさせているものは何かということ、彼等の性格面から割り出してみようとするのがこの調査の目的である。

調査方法

1. 対象

短くとも15年以上、長くなれば50~60年に亘る登山経歴を内外の山に持つ老練の登山家62名と、いまだ新進の大学山岳部員22名とである。

2. 調査項目

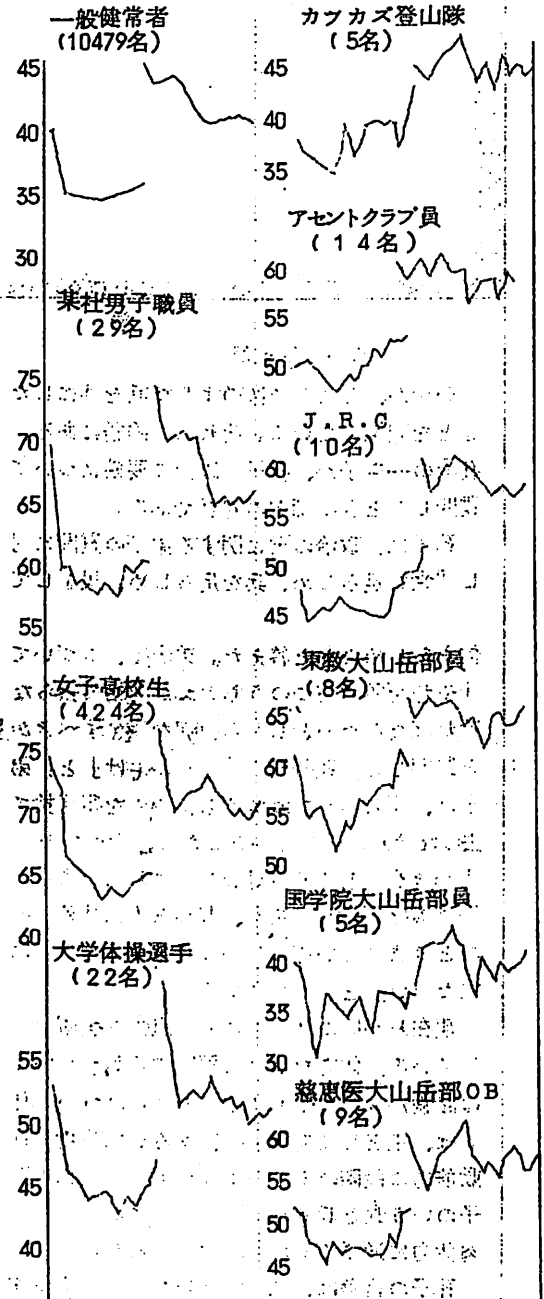
全員に対して学歴、登山歴、登山の目的などの調査と、クレッチユメル自己診断表(かつて早稲田大学心理学教室において内田勇三郎氏などを中心にして作製したものである)による性格調査を實施し、なお大学山岳部員と登山クラブ員との51名に対しては、内田クレベリン精神検査(以下内田検査と略称する)を實施した。

調査結果

1. まず内田検査によつて、登山家と特に登山と関係を持たない群(以下一般者と称す)とを比較してみると、第1、2図に示すように、その曲線型の傾向が著しく異つてることがわかる。すなわち、一般者のそれはいずれも健常者の常態定型を示しているのに対して、登山家のそれは、老練と新進の如何を問わずことごとく初頭を欠く上昇傾向になつてゐることである。このような傾向は、およそ山登りを志す人々には、極めて近似した性格特徴が共通にあることを示すものであると同時に

東京教育大学 小林 晃 夫
に、山と関係をとくに持たない人だちとは、

第1図一般者の平均曲線 第2図登山家の平均曲線



対照的な立場にある性格ということになる。そこで、従来の曲線研究からその性格特徴を述べると、この両者のもつとも顕著な相異点は、次のようなところにあるということができる。すなわち、一般者には社会的適応性があるのに対して登山家にはそれが乏しいことであり、また、前者はものの考え方が現実的、実際的であるのに対して、後者は理想的、空想的、理論的な傾向を持つものを多く含んでいるということである。

2. 次に、62名の同じ登山家仲間に見て、その中で登山目的と性格との関係をみると次のようになる。

まず最初に、目的の分類法から述べることにするが、各人が挙げているいくつかの目的の種類をみると、等しく自然を愛好するというような共通の目的は持ちながらも、なおその他の目的において、はつきりと異なる方向を示しているものがあるため、そこに重点をおいてまとめてみると、次のような5分類が可能である。すなわち、登山を人間形成や精神修養の場として強調する精神修養型(23名)、未知の探求や冒険の追求を強調する未知探求型(18名)、目的などなく、自然に没つていさえすればよいという自然沈潜型(12名)、レクリエーションを主眼とするレクリエーション型(4名)、それと体力増強に重点をおく体力増強型(5名)等がこれである。そこで、これらの目的別類型と、クレッチユメル自己診断表や内田検査からみた性格類型との関係づけをしてみると、次のようなことが挙げられる。すなわち、精神修養型は、社会的適応性には乏しきも、几帳面、きまじめに筋を通して考え、世のため人のためになるようなことをしようと心掛けるところのある粘着型、地道粘り型等がそのほとんどを占め、山を修業の場と心得るにいかにもふさわしい性格であるということが出来る。次の未知探求型は、社会的適応性があるとはいふものの、協調的であるよりも独断専行的の傾

きを持ち、思つたことをすばすばとやつてのける強さを持つ強気敢行型の性格であつて、未知の探求、冒険の追求などにふさわしさを持つている。自然沈潜型は、クレッチユメルという分裂性格で代表され、その性格が物語るように、山は修業の場でもなければ未知に誘ふものでもなく、ただ人間くささがなくて、その上美しく、清浄であるという理由だけで行くところであつて、ここが彼等の住心地のよい世界なのである。レクリエーション型は、躁うつ性格の抑うつ型に属する。もともとは社会的適応性を持つも、気重い気持が人間関係を煩わしく思わせ、それがときどき人のいない山へ息ぬきに誘ふといつた型である。だから彼等は外国の高い山は必要でなく、国内の手近い山で十分なのである。体力増強型は躁うつ性格の朗らか型に属する。彼等は山を精神的な対象とするよりも、身体的なものに重点をおく、彼等はあり余るほどの社会的適応性を持ち、この世に融けこんで住めるので山を社会生活以外に重要なものとして意義づける必要がないのであろう。

むすび

さて、以上の調査結果から、なぜ彼等は問われるか、また、問われながらもなぜ山に耽り続けるかということについての答を出さなければならぬが、それについては、次のような推測が可能である。

まず前者のなぜ問われるかであるが、おもしろいことがなぜか問われることは、どこか不合理な点を感じさせるからである。そこで、登山にはどこに不合理な点があるかということであるが、それはおそらく、多額の金と暇を費い、命の危険までもおかし、しかもそれに対して、社会的に報いらぬような何もものない無駄な行為というようなことであらう。だからこのことは、常識的な社会通念からすれば、得にもならない無駄なことをなぜするかはその問いの中味であり、さらに、そのようなことを敢えてするあなたは、

変りものですねといわれているのに等しい。しかし、この問いは、「そんな問いをするような人のいないところへ行きたいからだ」という答のように、彼等には通用しない。つまりこれをいうなれば、不合理だと思つて問うても、問われた方では当り前のことだと思つている関係なのである。そしてその関係とはこれをいかにえれば、問う人は多勢の人と人との関係の中で活動することに生甲斐を感じている人たちであり、問われる方は、そのような関係に生甲斐の意味を持たない人たちであつて、内田検査にも現われていたように、前者は社会的適応性に富み、現実的、実際的な考え方のもとに行動する人たちであり、後者は社会的適応性乏しく、現実を離して理論的、理想的、空想的な考え方のもとに行動しようとする人たちである。

次に、なぜ山へ登るかということであるがこれも、いままで述べてきたことと無関係ではない。すなわち、山とはまず人がいないと

ころであり、しかも一たび足を踏入ると、そこには無限の未知と冒険があり、また美もあれば清浄もあり、憩いもあれば人間試験の場もあるといつたように、一生を賭けてもなお費せぬさまざまな生きる材料の宝庫なのである。そこで、まず人がいないというところで社会的適応性を欠く人たちが山登りを始める動機が一つあり、そしてこういう人たちは、現実社会より住み心地がよいということとここに住みついてしまつている山岳族であつて社会族とは異種なのである。したがつて、なぜ山に登るかは、問うも問われるも通じ合えぬ間がらであり、また一生山登りをやめられない所以でもある。また、何かの動機で山を知らされると、未知の探求や冒険の追求で一生を賭ける一群もある。これらも前者とはその色合いを異にはしても、山キチガイといわれるにふさわしいほどにむきに熱中するものは持つている。そしてこれらのものたちは、社会的なものさしからははずれて計れないということと共通点を打つている。

体育心理学研究会月例会報告

第1回の月例会は、5月13日に東教大で開かれ、シンポジウムについてと月例会のもちかたなどについて話し合いが行なわれました。シンポジウムについては、許年の運動学習におけるイメージの役割の問題を今年度もつづけるか、あるいは学習曲線の問題、学習における個人差の問題、インストラクションなど新しい問題をとり上げるかなど意見が出されましたが、シンポジウム小委員会を作り委員に一任することになりました。又月例会の開催については、お茶大、日大、日体大、日女体大、早大、順大、教大、東大がもちまわりで行なうという申し合わせが行なわれました。

5月20日シンポジウム小委員会が教大で開かれ、すでに御存知のように、演題と演者を決めました。

6月15日には第2回の月例会が教大で行なわれ、シンポジウムの演題決定について松田氏から説明があり、演者の渡辺、杉本、調枝

の3氏が発表の要旨について説明しました。

そのあと、小林氏の「登山家の心理」という話がありましたが、その内容は本号に掲載したものです。

第3回は10月26日お茶の水女子大で行なわれ、体育学研究編集委員は昨年度に引きつづき大田、松田両氏が、大会号臨時編集員には杉原が出るのが決まりました。そのあとシンポジウムを顧りみて調枝氏からスキルの本質、構造などについて話があり、(11月4号に記載)活発な議論がたたかわされました。なお、曲角の発行が遅れ報告がおそくなつたことを深くおわびいたします。(杉原)

体育心理学研究会会報

「曲角」

昭和43年10月30日発行

代表表 鈴木 清

編集 松田 岩男

近藤 充夫

杉原 隆

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究室
体育心理学研究会

電話(460)0511 内 36